

平成26年9月17日(水)

老球の細道62号 バスケットボール誕生秘話Ⅴ
『バスケットボール生みの親、ジェームス・
ネイスミス博士の生涯 くそのⅠ』

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

バスケットボールを日本に伝えた大森平蔵のことを書いて、本家本元の創始者ジェームス・ネイスミス博士のことを書かないでは本末転倒もいいところである。

先日スペインで開催されていた男子バスケットボール・ワールドカップの表彰式においても、優勝したアメリカにはそれぞれの選手に金メダルが授与されたが、チーム・アメリカには「ジェームス・ネイスミス賞」という最高の勲章が最後に与えられたのである。バスケットボールにおいては「ジェームス・ネイスミス」は神様なのである。

最近色々なバスケットボールの指導者講習会において「バスケットボールの歴史」について話をすることがある。ネイスミス博士の人生、そしてバスケットボールを創造するに至るまでの歩みには感動させられる。私のような愚か者がネイスミスの名にちなんで、ペンネーム「ジェームス・ネイフーミン」を語ることは100年早すぎた。

ネイスミス博士は、カナダ・オンタリオ州オタワ(首都)の近郊、アルトモントという町で1869年11月6日に生まれた。そのため「11月6日」は私にとって神聖な記念日となった。毎年この日には最も好きな食べ物と飲み物を一人で味わい自己満足に陥る。なんのことはないビールとラーメンである。残念ながら私の長男は11月7日が誕生日。私の鬼嫁がたった一日フライングしてくれれば、その時歴史は変わった。ネイスミス博士と長男の誕生日を毎年一緒に祝うことができたのである。残念でしかたがない。

ネイスミスの両親はイギリス・スコットランドからの入植移民だった。3歳上の姉と6歳下の弟の5人家族だった。博士は9歳のとき、父母を亡くし、祖母と叔父の暮らす家に引き取られた。そんな逆境にもめげることなく真面目に学校に通い、体育スポーツ好きの、がっちりした体格に育った。しかし、不幸な出来事は続く。11歳のときには今度は祖母がなくなった。それでも幼いなりに叔父の農作業を手伝いながら小・中学校を卒業した。その後叔父から、人手が不足しているので農作業をもっと手伝うようにと言われた。そのため、やむなく高校を休学することになる。

この頃、農作業をしながら「自分の人生は果たしてこのままでいいのか」と疑問を持ち始めるようになった。「自分のような逆境にある人々に救いの手をさしのべられる牧師になりたい。そのためには大学に行かなければならない」。1881年、叔父さんに無理無理お願いして20歳で高校に復学、2年後に卒業した。その後1883年にモントリオールのマギル大学の年長の新入生となった。一日も早く卒業して一刻も早く牧師になるために、他のことにはいっさい目もくれず勉学に没頭した。

この大学生活の中で運命のスポーツとの出会いがあった。ガリ勉苦学生のネイスミスに先輩が声をかけてくれた。「少しはスポーツをやって身体を鍛えたらどうか」。それに対して、ネイスミスは「今のところ、この程度で体調を崩すことはないようです。それに、体育館やグラウンドに行っても汗を流す時間が惜しいのです」と答えた。まさに勉強に燃えた努力の男であった。

ある日運命の出来事が起こる。ネイスミスが親友と帰る途中、アメリカンフットボール

チームの練習を見ていたら、ある選手がけがをしてしまった。代わりの選手が誰もいないらしく、そこに居合わせたネイスミスが代役をやることになった。そしたら、あまりにもでき良かったので次の週の大学対抗戦まで出場するはめになった。

9歳の時に両親と死別してから、貧しい生活に耐えながらがんばってきた負けじ魂が、グラウンドでいかんなく発揮され、ついに大学アメリカンフットボールチームの中心選手となった。このできごとが、ネイスミスに牧師の道から体育・スポーツへの道、そしてバスケットボールへの道へと進ませることになった。まさに人生はドラマチック。〈続く〉